柿生文化

平成２１年 ７ 月１７日
川崎市立柿生中学校
郷土史料館情報・研究誌
第１２号

柿生を愛した文学者

柿生の魅力を探る

― 遠藤周作・川上徹太郎の想い ―

校長　板倉 敏郎

「狐狸庵（こりあん）先生」こと遠藤周作が１９６６年に出版した『狐狸庵閑話』の冒頭に柿生が登場してきます。「狐狸庵とは江戸日本橋を離るること８里、柿生の村と呼ばれる山里に世を厭（いと）って結んだ我が庵（いおり）の名であるが（中略）昔、駒場に住んでいた頃、足しげく遊びにきた友達も、流石ここまでは訪れることも稀である。（中略）読書に飽きると庵を取り巻く雑木林に遊び野鳥の群れを眺めて楽しみ、日暮れれば夕餉そこそこにすませて風の音・・・・」と書いています。この文を読みますと遠藤周作は、柿生に住んでいるようですが、実はこの狐狸庵は玉川学園の近くにありました。なぜ「柿生」にそんなにこだわっていたのでしょうか。不思議なことです。

（遠藤周作 氏）

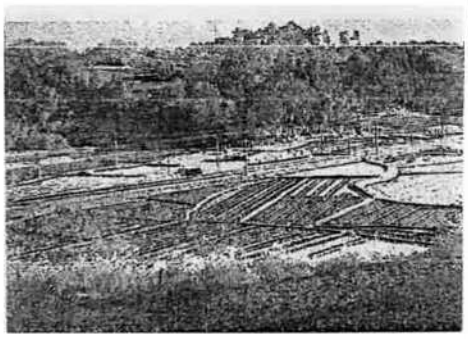
川上徹太郎はその著『自然の中の私』のなかで「なぜ柿生なんかに住んでるのかとよく聞かれるが（中略）友人の白洲次郎の好意に甘えて鶴川村に居候しているうちに近所を探してここに住み着いたまでだ。住めば都なんてやせ我慢するまでもなく、中々好いところであることを感じるようになった」と記しています。

柿生はなぜこうも文人に愛されるのか、これは私にとっても長年の疑問でもありました。『柿生文化』の第１１号にものせましたが歌人の北原白秋や荻原井泉水においても然り、多くの方々が柿生の自然に随分と心を引かれているようです。

東京の近郊都市としての川崎にこれだけの自然を豊かに残すところは、中々見当らないようです。確かに春には鶯が美しい声を聞かせ、この時期には時鳥（ほととぎす）が「ホンゾンカケタカ」（私の田舎ではこう言っていた）とよく鳴いています。

しかし、なんといっても文人の心を引くのは「柿生」という地名にあるのではないかと思っています。秋も深まった頃、きれいに澄んだ青空に民家の軒先に映える柿の色、青と赤のコントラストが美しい。さらに木々の葉が枯れ落ちた後にも取り残された柿の実がさらに郷愁を誘う。「柿」には、自然や幼き頃の情緒の世界に回帰させる不思議な力があるようです。「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」この歌にある「柿」の魅力です。

ちなみに歌人であり文芸評論家の馬場あきこ氏や北欧文学の山室静氏も柿生にお住まいです。　隣の緑区鉄町には「田園の憂鬱」等の作品で有名な佐藤春夫氏が住まわれていました。



（昭和２７年頃の柿生）

シリーズ　「麻生の歴史を探る」　第１１話

郡衙の衰退、武士団の発生

奈良に旅して驚くのは、平城京跡（710年～）の広大さです。朝廷の全国支配、中央集権の象徴で、ここに遠い貧しい東国の農民から貢ぎ物が運ばれていたのかと思うと感慨深いものがあります。この頃、上麻生の山口台や岡上の丸山遺跡に代表される私たちの祖先の暮らしは、竪穴住居に掘立柱、麻布を織り、防人を勤め、郡衙の租、庸、調に怯えての生活だったのですから。

郡衙の役人

天平13（741）年、律令制度の抑圧に耐えてきた農民に福音が起こります。仏教に熱心な聖武天皇は仏教で国の繁栄を図るべく国分寺令を出し、「墾田永年私財法」の制度を設けます。今まで口分田といって宮地だった農地が、新しく開墾した土地は永年自由に自分のものとしてよい、というもので、農民にとっては大変な励みであり喜びであったに違いありません。

ところが、都が京都に移され（平安京794～）、京の都で摂政藤原貴族が栄華を極めたその頃、東国の村々は思いもよらぬことになっていました。それは、せっかくの墾田永年私財法は零細農民に益するものではなく、財力を持つ貴族の荘園、有力社寺や豪族が私有地を拡げる結果となり、勅旨牧だった石川、立野牧なども有力者に牛耳られ軍需産業化を図られ、馬は戦力に利用され武士団の発生源となり、郡衙は機能を失い、結果として律令制度の崩壊に連なっていきます。

承平5（935）年、武蔵国一帯に平将門の乱が起こります。初めは一族間の争いであったこの戦いですが、東夷と蔑まれた東国の武士と農民の、中央に対する抵抗でもありました。治安の乱れた山野には野盗が出没し、武力を持つ在地武士と農民の奇妙なもたれ合いは、中央支配を拒みながら所領地を拡げ、立野牧からは都筑党が、石川牧からは石川党が、小野牧からは横山党の武士団が誕生し、前九年の役（1051年）には横山党に属した現古沢の古沢氏が安部貞任（陸奥の国の支配者）の首を取ったといわれています。

その昔、王禅寺の日吉から通称「山王坂」を超えたところに「保木の薬師様」とよぶ草屋根の小さなお堂がありました。ここは石川牧の武士石川六郎の在所といわれ、発見された薬師如来座像は県指定重要文化財（承久3年銘）は現在県立歴史博物館に寄託されています。昔の保木は今は青葉区美しが丘西となりました。そしてお堂は立派に再建され、毎年9月12日に薬師如来座像はお堂に帰り、瀟洒な街の人々に石川牧の文化を伝えています。

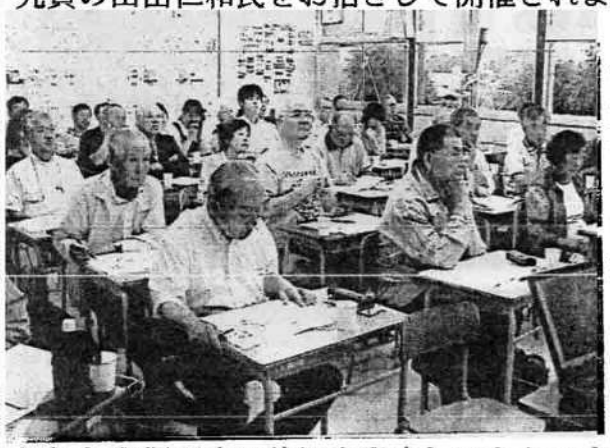
「保木の薬師様」

文、小島一也氏

柿生２万５０００年間のロマンを語る

第１２回カルチャーセミナー
山田仁和氏の講演に教室が満員

７月６日（月）午後６時より行なわれた、第１２回柿中カルチャーセミナーは、４５名の参加で教室は、満員状態となりました。この熱気溢れる今回のセミナーは、「早野上ノ原遺跡に見られる古代・中世の柿生」と題して、吾妻考古学研究所主任研究員の山田仁和氏をお招きして開催されました。



「早野上ノ原遺跡」は多摩丘陵の一角に位置し、標高約４０～５０ｍ、東西約２７０ｍ、南北約１００ｍの舌状の地形にある複合遺跡（多くの時代の遺跡が複合的に重なっている遺跡）です。

周辺には、早野横穴墓群、東柿生小学校内遺跡、下麻生亀井古墳群、王禅寺狐塚古墳、子ノ神社古墳等など多くの遺跡が発見されている地域です。

すでに第２次調査が終了し８月からは、第３次調査が行なわれる予定だそうです。

今回の講演では、第１・２次調査が行なわれた発掘調査の状況を発表してもらいました。詳しい研究や報告は、今後に待たれるところであります。

特に、注目されることは、この遺跡は、約２５０００年前の旧石器時代から江戸時代までの複合遺跡でその間の複数の時代の遺物が発見されました。以下、各時代の発掘状況です。

旧石器時代については、２５０００年より古い時代の層から石器が発見され、３点のナイフ型石器も見つかりました。

縄文時代については、多くの土器とともに、縄文中期前葉～後期初頭（約5000~4000年前）の住居址２５軒、落し穴９基などが発見されました。

弥生時代後期～古墳時代初頭については、住居址５軒、建築部材が焼けて炭化したものや焼土が出土し、これは、火災にあったものと考えられます。

古墳時代については、住居址２軒、直径約１６ｍの円墳とそれを囲むように掘られた周溝（住居の周りに掘られた溝）が発見されましたが埋葬部分が見つかっておらず墳丘（古墳の土が盛られた部分）部分が削られた際に失われたものと考えられるそうです。

奈良・平安時代については、住居址５軒、堀立柱建物址（高床式建物の可能性がある）が発見されました。

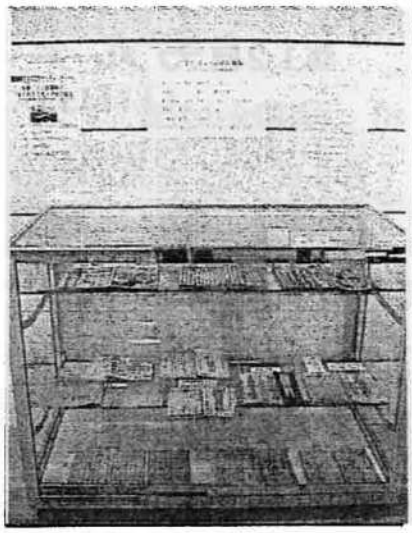
中世～近世以降については、竪穴式遺構１基、地下式坑（地下に掘った穴）４基、道路状遺構（道路の跡）２基、土坑（土に掘られた穴）５４基が発見されました。また、地下式坑の１箇所からは馬の骨が発見されました。

（講演する山田仁和 氏）

今後のさらなる調査・研究に期待いたします。

ミニミニミュージアム開館

第1回 展示
テーマ「江戸から明治初年の教科書」



来年春にせまった「郷土史料館」開館を前に「ミニミニミュージアム」を開館することになりました。開館といいましてもショーケース１台の小さなものですが、本格的開館までの間、小規模ながら実施していきます。

初回は、江戸時代の寺子屋で使用された教科書の「庭訓往来」等３点と明治初年の教科書で、明治５年に学制が発布された翌年の明治６年に発行された「小学読本」をはじめ各種の教科書を展示いたしました。

展示場所は、Ａ館とＢ館１階の渡り廊下にあります。

―― 英字新聞「ファーイースト誌」がとらえた日本の姿 ―― NO5

幕末期の写真から拾う人々の生活

O Shishi, Street Tumblers,

右の写真は、「角兵衛獅子（かくべいじし）」と呼ばれるもので、ご覧のとおり少年が数人組で曲にあわせながら宙返りなどの軽業（かるわざ）をやり、見物人からお金をもらっていました。

「越後獅子」とも呼ばれ、捨て子や誘拐されてきた子供を親方が買いたたき、酢を飲ませて骨を柔らかくしたといわれていました。どうやら人身売買もかなりおこなわれていたようです。

ちなみに『THE FAR EAST』誌には、「OSHISHI STREET TUMBLERS」（お獅子の大道芸人）と書かれている。

第１３回 カルチャーセミナーのご案内

◎日　時　平成２１年８月２８日（金）　午後６時より
◎会　場　柿生中学校　教室
◎テーマ　「イスラム世界とその現状」
　・イスラム文化とイスラム的価値観
　・イスラム情勢と欧米諸国との関係について
　・ガンダーラ遺跡などの歴史的遺跡の現状
◎講　師　坂東　修 氏（3月にパキスタンのイスラマバード日本人学校より3年間の任期を終えて帰国）
　　福山　創 氏（3月にサウジアラビアのリヤド日本人学校より3年間の任期を終えて帰国）